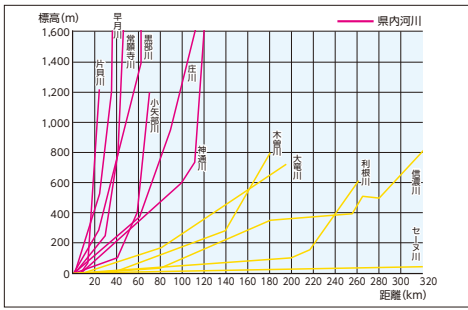


暮らしを脅かす暴れ川 貧しさの中、寺子屋教育に子どもの未来を託した親心



■河川縦断勾配の比較

富山県を流れる河川は急流で短いのが特徴。そのほとんどが「暴れ川」で、昔から大雨や台風のために氾濫し、人々の暮らしを苦しめてきました。安政5年(1858)に起きた飛越地震に伴う大洪水では、常願寺川の上流にあった土砂が一気に流れ出し、富山平野一帯が泥の海になったという記録があります。

現在では地震や火事が少なく、「安全で住みやすい県」と定評のある富山県ですが、その歴史はまさに災害との戦い。災害による貧困から抜け出すため懸命に働き、子どもに夢を託し教育を受けさせた暮らしぶりが「勤勉」、

富山県に寺子屋が開かれたのは寛永9年(1632)、八尾町の聞名寺で商いに必要な知識を教えたのが始まりです。全国的にも早い開業で、江戸幕末期にかけて県内各地に広まってきました。教育熱心な親たちは子供たちを寺子屋に通わせ、読み書きやそろばん、日常のしつけ、さらには武芸まで習得させたそうです。

「教育熱心」という県民性をつくり上げたのです。富山県に寺子屋が開かれたのは寛永9年(1632)、八尾町の聞名寺で商いに必要な知識を教えたのが始まりです。全国的にも早い開業で、江戸幕末期にかけて県内各地に広まってきました。教育熱心な親たちは子供たちを寺子屋に通わせ、読み書きやそろばん、日常のしつけ、さらには武芸まで習得させたそうです。



寺子屋の様子

ドリームコラム① 人間教育を重視した寺子屋



寺子屋といえば「読み・書き・そろばん」を教える塾というイメージがありますが、実は人としてのしつけを重んじる人間教育が行われていました。

氷見市旧女良(めら)村姿にあった「広澤塾」の規則からも、そんな一端が垣間見られます。また、私塾「臨地居(りんちきょ)」は実学に加え、売薬に関する知識も教え、「小西屋」の名で盛況を誇り、門弟800人を数える我が国屈指の寺子屋でした。

写真／奈良女子大学学術情報センター所蔵

近代富山の根幹 知識と資本で郷土を拓く 売薬産業と自然を活かした工業振興



■江戸期のたたずまいを残す池田屋安兵衛商店

古くは立山信仰に起源があると言われている越中売薬。使うのが先、利益は後からという「先用後利」の配置薬商法は江戸時代、全国へと広まりました。売薬さんが得意先から持ち帰る土産話は、見知らぬ地の産業や食物の話、華やかな都の歌舞伎の話など様々。情報が少なかつた時代、富山に「知のネットワーク」を構築していきましました。

売薬産業は富山の主要産業として確立。その莫大な資本は明治期に水力発電を生み、銀行や電力会社を興し、アルミやパルプ、化学工業などの企業を誘致しました。富山の地場産業の

ルーツをたどれば必ず薬が出てくると言えるほど、売薬産業は富山の工業振興に貢献したのです。

また県内では、売薬産業の担い手を育成する学校が創設されました。明治27年創立の共立富山薬学校は現在の富山大学薬学部、昭和2年創立の市立富山薬学校は富山北部高校「くすり・バイオ科」に、そして昭和10年創立の町立滑川薬業学校は滑川高校薬業科に継承されています。

県立高校の薬学科は全国に4校と希少で、そのうち2つが県内の高校。今も「薬都とやま」を支える薬のスペシャリストを多数輩出しています。

ドリームコラム②

報徳教育と富山県



昭和初期に「二宮尊徳」の遺訓である「孝行、兄弟愛、勤労、報恩、奉仕」などが本県教育、教化の指導精神とされ、次々と報徳社が結成されました。

全国にある報徳結社260社のうち、富山県は106社に及び、報徳運動が特に盛んな県として知られています。(展示室では、県内小学校にある「二宮金次郎」像の写真を展示中)



「人のため、 地域のため」 藤井能三と馬場はるが作ったふたつの公立学校



T014 馬場はる



ラファディオ・ハーン(小泉八雲)

馬場はるは、ラファディオ・ハーンの遺族から蔵書を買って、「ヘルン文庫」として、旧制富山高等学校へ開校記念に寄贈している。

明治5年(1872)、政府は全国に小学校を創設するという学制を發布しました。しかし、その資金は地元負担としたため実現は困難なものでした。そんな中、立ち上がったのが伏木の廻船問屋の息子で実業家だった藤井能三(1846~1913)でした。開国から維新の激動期を目の当たりにした能三は、「新しい時代を拓くには教育が必要」と明治6年、私財を投じて県最初の伏木小学校を開校。2年後には伏木港を望む高台に新校舎を建築し、県内の小学校教育をリードしていきました。

また、岩瀬の廻船問屋に嫁いだ馬

場はる(1886~1971)は夫亡き後、事業経営と子供の養育に精魂を傾けました。はるは高等教育機関の設置を願って、100万円もの大金(現在の貨幣価値で10億円以上)を県に寄付。その後さらに34万円を寄付しました。これにより大正13年、富山市蓮町に旧制富山高等学校(現富山大学)が開校しました。学校の跡地は今、馬場記念公園として人々の憩いの場になっています。

このように富山の教育は明治から大正時代、次世代を担う子供のため、私財を投げ打った民間人の情熱によって支えられ、発展したのです。

明治初期の校舎は「中央廊下式」が多かったのですが、採光や通風などの問題があったため、明治末期以降は「南側教室北側廊下」が定型となりました。

校舎建築は木造から鉄筋コンクリートへと変化し、画一化が加速するとともに、多様な教育形態に対応する「多目的・オープンスペース」の設置や、コンピューター環境の整備などが進められています。

ドリームコラム③

校舎建築の移り変わり



Z001 校舎の模型(明治8年~昭和51年)

社会に学ぶ 14歳の挑戦

親と子、地域に脈々と受け継がれる 進取の心



■ 14歳の挑戦「老人介護施設」での体験

中学2年生が1週間、学校外で職業体験や福祉ボランティア活動に参加する「14歳の挑戦」。心と体のバランスが取りにくくなる思春期の子供たちの健全育成のため、富山県教育委員会が企画し、平成11年度からスタートした事業です。子供たちが規範意識や社会性を高め、将来の夢を考えると共に、地域社会への感謝の念を再認識する絶好の機会となっています。

初年度は県内27の中学校で実施。3年目には県内86の全中学校で行われるようになりました。当初は生徒の受け入れにあまり協力的でなかった事業所もありましたが、「今後の事業所は社会貢献が大切」という意識が徐々に浸透し、現在は県内3200か所以上が受け入れていています。

この事業は学校、保護者、地域社会が力を合わせ、子供の実態を共通認識することから始まりました。そして試行錯誤を繰り返しながら、達成感も負担感も共に分かち合ってきたところに長年、継続されている理由があるのです。

「14歳の挑戦」は地域ぐるみのじめめ防止、また最近問題視されているニート解消にも役立つ事業だと評価され、全国に発信されています。

現在とは違い、カタカナで書かれていた昔の教科書。文字を一字一字覚えさせる教科書にはじまり、次第に文章から文字を指導する方法へと変わっていきました。戦時下は戦争に関する題材がふえ、国家主義的色彩が強まっています。

この後、ひらがなの「みんないい子」で、はじまる教科書が登場しました。

ドリームコラム④

教科書の移り変わり



2005

小学1年生用の国語教科書
(明治37年～昭和21年)